

The “Red Death” had ❶long ❷devastated the country. No ❸pestilence had ever been so fatal, or so ❹hideous. Blood was its ❺Avatar and its ❻seal — ❼the redness and the horror of blood. There were sharp pains, and sudden ❽dizziness, and then ❾profuse 5 bleeding at the pores, with ❿dissolution. The scarlet stains upon the body and especially upon the face of the victim, were ⓫the pest ban which shut him out from the aid and from the sympathy of his ⓬fellow-men. And ⓭the whole seizure, progress, and termination of the disease, were the incidents of half an hour.

10 But ⓮the Prince Prospero was happy and ⓯dauntless and sagacious. When ⓰his dominions were half depopulated, he

「赤死病」が、赤い死が、長いあいだ国を荒らしていた。これほど致命的な、これほどおぞましい病はかつてなかった。血がその化身であり紋章であった——その赤さ、その血の恐ろしさが。激しい痛みが生じ、突如めまいが襲い、やがて毛穴からおびただしい量の血が噴き出し、息絶える。犠牲者の体を、特に顔を覆う^{くれない}紅の汚点こそが追放宣告だった。それが現われた者はもはや、仲間からの助けも同情も望めなかった。発病し、病が進み、事切れるまで、ものの三十分とかからなかった。

だがプロスペロ公は幸福で、恐れを知らず、頭脳明晰であった。領地の人口が半分に減った時点で、宮廷の騎士と貴婦人の中から、健康で安楽に暮ら

The Masque of the Red Death: ひとまず多くの既訳と同じく「赤死病の仮面」と訳したが、masque は「仮面劇、仮面舞踏会」「仮面をつけた人」「仮面」等々を意味し、意図的に曖昧なタイトルである。1842 年の初出時には Mask と綴られていたが、1845 年に *Broadway Journal* に採録された際に Masque に変えられた。the Red Death は架空の病名だが、14 世紀にヨーロッパで人口の 3 分の 1 が犠牲になったと言われる the Black Death（黒死病、ペスト）を明らかに連想させる。

- ❶ long: 長いあいだ (for a long time)
- ❷ devastate(d): ～を荒廃させる
- ❸ pestilence: 疫病
- ❹ hideous: ぞっとする。horrible などに較べて、嫌悪を催させるというニュアンスが強く、類語はむしろ repulsive など。
- ❺ Avatar: 化身。元来はヒンドゥー教のヴィシュヌ神の化身だが、いまではすっかりインターネット言語の一部と化した。
- ❻ (a) seal: 印章、紋章
- ❼ the redness and the horror of blood: 主語の Blood をもう一度言い直している。
- ❽ dizziness: めまい
- ❾ profuse bleeding at the pores: 毛穴 (the pores) からのおびただしい (profuse) 出血

- ❿ dissolution: 死
- ⓫ the pest ban: 疫病発生による立入り禁止令。ちなみに pest はここでは pestilence と同義だが、現代英語では普通「害虫、害獣」のこと。
- ⓬ fellow-men: 漠然と「仲間」を指しもすれば、fellow human beings ということで「人類」全体を指しもする。
- ⓭ the whole seizure, progress, and termination: 発症 (seizure)、進行、臨終 (termination) までの全段階
- ⓮ the Prince Prospero: Prince はこのように、「王子」ではなく、小国の「君主」「公」を意味する場合も多い。Prospero という名を見れば誰もがシェークスピア最後の戯曲 *The Tempest* (1611) を思い浮かべる。追放された君主プロスペロは魔法を使って世界を動かす力を取り戻すが、最後は魔法を捨ててただの人間に戻る（そしてシェークスピアもペンを捨てて故郷に戻った）。この小説の読者は、このプロスペロがシェークスピアの君主とどう同じでどう違うかを考えながら読み進めることになる。ちなみに the Red Death という病の名は、シェークスピアのプロスペロに囚われた怪物 Caliban が、俺に言葉なんかを教えやがって、とプロスペロを呪詛するとき口にする “The red plague rid you”（お前なぞ赤い疫病で死んじまえ）という科白を連想させる。
- ⓯ dauntless and sagacious: 怖いもの知らずで智にたけた
- ⓰ his dominions were half depopulated: 所領の人口が半分に減ってしまった

fantastic appearances. But in ❶ the western or black chamber the effect of ❷ the fire-light that ❸ streamed upon the dark hangings through the ❹ blood-tinted panes, was ❺ ghastly in the extreme, and ❻ produced so wild a look upon the countenances of those who ❽ entered, that ❾ there were few of the company bold enough to ❿ set foot within its precincts at all.

It was in this apartment, also, that there stood ⓫ against the western wall, ⓬ a gigantic clock of ebony. Its ⓭ pendulum swung to and fro ⓮ with a dull, heavy, monotonous clang; and when ⓯ the 10 minute-hand made the circuit of the face, and ⓰ the hour was to be stricken, ⓱ there came from the brazen lungs of the clock a sound

途方もない姿かたちが生まれていた。だが、西の端の黒い部屋では、炎のもたらず、血の色をした窓を通して黒いつづれ織りに流れ込む光の効果たるや、まさに身の毛もよだつ恐ろしさで、入ってくる者たちの表情を何とも狂おしいものに変えてしまうので、中に足を踏み入れる度胸のある者はほとんどいなかった。

またこの部屋には、西側の壁にぴったり付いて、漆黒の巨大な時計が置かれていた。その振り子は鈍い、重い、単調な音を立てて左右に揺れ、長針が文字盤を一周して時を告げる段になると、時計のその真鍮の肺から、明瞭な、

- ❶ the western or black chamber: 二つの部屋について言っているのではなく、「西の、すなわち黒の部屋」。
- ❷ the fire-light: 燃える火の明かり
- ❸ stream(ed) upon ...: ～に注ぐ
- ❹ blood-tinted: 血の色合いを帯びた
- ❺ ghastly in the extreme: 極度に (in the extreme) 恐ろしい
- ❻ produced so wild a look upon the countenances: 顔つき (the countenances) にきわめてすさまじい (wild) 表情を作り出したので。so wild a look は such a wild look と言っても同じで、次行の that there were few ... につながる (細かいことを言えば、so は形容詞や副詞 (この場合 wild) にかかり、such は名詞句 (この場合 a wild look) にかかる)。
- ❼ there were few of the company bold enough to ...: ～するほど大胆な者は、居合わせた者たち (the company) の中にはほとんどいなかった
- ❽ set foot within its precincts at all: その境界 (precincts) 内に少しでも (at all) 足を踏み入れる。at all は否定文・疑問文で多く使われ、ここでもその前が there were few ... と否定的な内容なので、ごく自然に出てきている。
- ❾ against the western wall: 西側の壁を背に。西端の部屋の西側の壁なので、これら部屋の連なりの一歩奥に当たる。
- ❿ a gigantic clock of ebony: 巨大な (gigantic) 黒檀 (ebony) 作りの柱時計。gigantic はポーが好んで使った言葉で、世界に対する恐怖感のようなものに

じみ出ているように思える。“I approached and saw, as if graven in *bas relief* upon the white surface, the figure of a gigantic cat.” (近づいてみると、白い表面にあたかも浅浮彫りにされたかのように、巨大な猫の姿が見えた。“The Black Cat,” 1843)

- ⓫ (a) pendulum: 振り子
- ⓬ with a dull, heavy, monotonous clang: 鈍く重々しく単調なガランガランという音を立てて。clang は通常、振り子の音の形容に使われる語ではない (普通なら tick-tock など)。ポーの振り子は大半の振り子よりずっと禍々しい。その禍々しさは翌年発表した “The Pit and the Pendulum” (「落とし穴と振り子」、1843) においてさらに増幅される。
- ⓭ the minute-hand made the circuit of the face: 分針 (the minute-hand) が文字盤 (the face) を一周した
- ⓮ the hour was to be stricken: 時刻を打つべき時になった。stricken は現代英語なら struck。
- ⓯ there came from the brazen lungs of the clock a sound ...: ここも <there + 動詞 + 主語の部分> という構造で (→ p. 29 の註⑩)、sound から主語が始まる。the brazen lungs (真鍮の肺) も時計について普通に使われる表現ではなく、ポーにおける時計＝時間の禍々しさをさらに増している (brazen は現代英語では「厚かましい」の意)。

I ❶ resumed my downward way, and stepping out upon the level of the railroad, and drawing nearer to him, saw that he was a ❷ dark sallow man, with a dark beard and ❸ rather heavy eyebrows. ❹ His post was in ❺ as solitary and dismal a place as ever I saw. ❻ On either side, ❼ a dripping-wet wall of jagged stone, ❽ excluding all view but a strip of sky; ❾ the perspective one way only ❿ a crooked prolongation of this great dungeon; the shorter perspective in the other direction ⓫ terminating in ⓬ a gloomy red light, and the gloomier entrance to a black tunnel, ⓭ in whose massive 10 architecture there was ⓮ a barbarous, depressing, and forbidding air. ⓯ So little sunlight ever found its way to this spot, that it had ⓰ an

坂道をさらに下っていき、線路の高さに降り立って、近くまで来てみると、相手は浅黒い、血色の悪い人物で、黒っぽい顎ひげを生やし、眉も相当濃かった。ここまで辺鄙な、荒涼とした仕事場は見たことがない。左も右も、井戸のように切り立つぎざぎざの岩は水が滴るほど湿り、視界をほぼ完全に遮っていて、細いひと筋の空が見えるばかり。一方を見通せば、この大なる土牢がところどころ曲がりながらどこまでも延びている。もう一方の見通しはもう少し短く、陰気な赤い警告灯とともに終わっていて、そこから、黒いトンネルがいっそう陰気な口を開けている。トンネルのどっしりした造りには優雅さのかけらもなく、気の滅入る、人を寄せつけぬ気配が漂っている。日の光もここまでたどり着くのはごくわずかで、光すら土臭い、^{まがまが} 稠々しい匂い

- ❶ resumed my downward way: 下っていく歩みを再開した
- ❷ dark: dark は髪のことを言っているのか肌のことを言っているのか迷うことが多いが、ここは次に sallow (血色が悪い) とあり、そのあとは a dark beard and rather heavy eyebrows と毛の話をしていることから考えて肌 (特に顔) の方か。
- ❸ rather: イギリス英語では「かなり、相当」、more than a little というニュアンス。
- ❹ His post: 彼の持ち場
- ❺ as solitary and dismal a place as ever I saw: 今まで見たことがないくらい孤立して (solitary) 陰鬱として (dismal) いる。気持ちとしては Such a solitary and dismal place! ということだが、as ... as の ... 部分にはまず形容詞や副詞が来ないといけなので、solitary and dismal がまず置かれている。He was too good a man for such a job. (そんな仕事にはもったいない人物だった) などと同じ。as ever I saw は現代なら as I had ever seen というのが普通。
- ❻ On either side: 両側とも。以下、l. 9 の tunnel まで情景を簡潔に描写すべく動詞はすべて省かれている。
- ❼ a dripping-wet wall of jagged stone: ぎざぎざの岩 (jagged stone) で出来た、水がぼたぼた滴る (dripping) ほど湿った壁
- ❽ excluding all view but a strip of sky: 一筋の空 (a strip of sky) 以外はすべての視界を締め出し (excluding)。but は「～を除いて」で、第4巻 p. 98,

- ll. 6-7 の 'she could do nothing but listen to it' (その音を聞くだけで精一杯だった) と同じ。
- ❾ the perspective one way only ...: 一方の (one way) 眺めは～だけで。perspective はある地点から見た「眺め」「展望」。このあと p. 116, l. 12 では a perspective-glass (望遠鏡) という形で出てくる。
- ❿ a crooked prolongation of this great dungeon: 湿った岩に左右を囲まれているこの場所を「大なる地下牢」(this great dungeon) と表現し、その先の風景もこの地下牢の「歪んだ延長」(a crooked prolongation) だと述べている。谷底を包むじめじめした感触や暗い閉塞感が依然強調されている。
- ⓫ terminating in ...: ～で終わって
- ⓬ a gloomy red light: 陰鬱な赤い警告灯
- ⓭ in whose massive architecture there was ...: (そのトンネルの) どっしりした構造には～があった
- ⓮ a barbarous, depressing, and forbidding air: 野蛮で、重苦しい、人を寄せつけない空気
- ⓯ So little sunlight ever found its way to this spot: ever はこのように、何かがめったに、あるいは絶対、起きないと言うときにごく自然に挿入され、その「めったに起きなさ」を強調する。Nothing ever happens in this town. (この町では全く何事も起こらない。『コンパスローズ英和辞典』)
- ⓰ an earthy, deadly smell: 土臭い、死を想わせる臭い

Toward the end of her day in London Mrs Drover ❶ went round to her shut-up house to look for several things she wanted to take away. Some belonged to herself, some to her family, who were by now used to their country life. It was late August; ❷ it had been ❷ a steamy, showery day: at the moment ❸ the trees down the pavement ❹ glittered ❺ in an escape of ❻ humid yellow afternoon sun. Against ❼ the next batch of clouds, already ❽ piling up ink-dark, broken chimneys and ❾ parapets ❿ stood out. In her once familiar street, ⓫ as in any unused channel, an unfamiliar 10 ❿ queerness had ❿ silted up; a cat ⓬ wove itself ⓭ in and out of ⓮ railings, ⓯ but no human eye watched Mrs Dover's return.

‘The Demon Lover’ というタイトルを見て、英語圏の読者は、同じタイトルの、イギリスの古いバラッドを連想する。すでに人妻となった女性の許に、昔の恋人が戻ってきて、彼女を連れ出し、船に乗せ……このあたりで男が悪霊であることが見えてきて、船が沈んで歌は終わる。読者はボウエンの物語がこの歌をどうなぞり、どうずれるかを考えながら読むことになる。

- ❶ went round to her shut-up house: 閉めた自宅に寄った。go round はほかの場所に行ったあとに行く、というニュアンス。Let's go round to Tom's house on the way home. (帰りがけにちょっと回って、トムの家寄ろう。『動詞を使いこなすための英和活用辞典』)
- ❷ a steamy, showery day: 蒸し暑い、にわか雨の多い一日
- ❸ the trees down the pavement: 舗道の先の木々。p. 56, l. 8 の ‘and looked down the Line’ (線路の方を見やった) と同じで、down は「高低」を言っているわけではない。
- ❹ glitter(ed): きらきら輝く
- ❺ in an escape of ...: (通常、水・ガスなどが) 漏れ出て
- ❻ humid: 湿気の多い、蒸し暑い
- ❼ the next batch of clouds: a batch は「ひとまとまり」「一回分」の意で、その中ではある程度の均質性があるという含みがある。I have a batch of letters for you to sign. (署名していただく手紙が一束ほどあります。『ロングマン英和辞典』)

ロンドンでの一日も終わりに近づいてきたところで、ドロヴァー夫人は持って帰りたいものを探しに、畳んだ自宅に立ち寄った。自分の持ち物、もう田舎の生活にもすっかり慣れた家族の持ち物を探すつもりだった。八月後半の、湿気の多い、時おり雨も降る日。と、舗道の先に並ぶ木々が、水気を含んだ黄色い午後の陽光を解き放ってギラッと光った。次に流れてきた、すでにインクのような暗い色に積み上がりつつある雲のかたまりを背景に、家々の壊れた煙突や欄干がくっきり浮かび上がった。使われない水路がつねにそうなるように、かつてよく知っていた街路に、見慣れぬ奇妙さが砂泥のように溜まっている。猫が一匹、階段の手すりのすきまから出たり入ったりをくり返したが、いかなる人間の目もドロヴァー夫人の帰還を見届けては

- ❸ piling up ink-dark: インクのように黒々と積み重なって
- ❾ parapet(s): (バルコニー・橋などの) 欄干、手すり
- ❿ stood out <stand out>: 目立つ、際立って見える
- ⓫ as in any unused channel: 直訳は「使われていないどんな水路とも同じように」。
- ❿ queerness: 奇妙さ。queer はいまでは規範的でない性的指向を表わす言葉として市民権を獲得している言葉だが、1910年代から homosexual の類義語として、侮蔑的に使われはじめた。1939年刊、ゲイ作家 Christopher Isherwood の *Goodbye to Berlin* でも一人の登場人物が ‘Men dressed as women? As women hey? Do you mean they're queer?’ (女装した男? 女装だって? クィアってこと?) と言っている。ここでは基本的に strange の同義語だが、strange よりもいわばストレンジ度が高い感じがする。
- ⓬ silt(ed) up: 沈泥がたまる。l. 9 の as in any unused channel の比喩を引き継いでいる。
- ⓭ wove itself <weave itself>: 縫うようにして (ジグザグに) 進む
- ⓮ in and out of ...: ~を出たり入ったり
- ⓯ railing(s): 手すり、欄干
- ⓯ but no human eye watched ...: 単に「誰も見ていなかった」の意にとれそうだが、人間以外の目については話が別、とともとれる言い方である。

Inside ❶ the pink-striped booth of the ❷ Asiatic Professor only ❸ the marvellous existed and ❹ there was no such thing as daylight.

The puppet master ❺ is always dusted with a little darkness. ❻ In direct relation to his skill he ❼ propagates ❽ the most bewildering 5 enigmas ❾ for, ❿ the more lifelike his marionettes, the more godlike his manipulations and the more radical ❶ the symbiosis between inarticulate doll and articulating fingers. ❷ The puppeteer ❸ speculates in ❹ a no-man's-limbo between the real and ❶ that which, although we know very well it is not, nevertheless seems

アジア人教授のピンクの縦縞の小屋の中には驚異しか存在せず、昼の光などというものはなかった。

この人形使いにはいつも、わずかな闇が埃のようにかぶさっている。人を心底戸惑わせる謎をくり広げ、己の技術を駆使する。その技術の高さに正比例して、教授の操る人形たちはいっそう生きているように見え、教授の行なう操作はいっそう神のようになり、物言わぬ人形と、物言うごとくにすべてを操る指との共生関係もますます根源的になっていく。現実と、現実ではないとよくわかっているにもかかわらず現実のように見えるものとのあいだ

- ❶ the pink-striped booth: この「ピンクの縞模様の小屋」という一言で、市、見世物という雰囲気がかき上がる。
- ❷ Asiatic: Asiatic は Asian と意味はほぼ同じだが、異国性がより強まる感じがする（現在では侮蔑的に響くので Asian の方が一般的）。
- ❸ the marvellous: the + 形容詞で「～な人たち、～なこと」を意味する用法がこの作品では多用されている。次の段落だけでも the real (l. 8), the living (p. 162, ll. 1-2, l. 3), the undead (l. 2) がある。
- ❹ there was no such thing as daylight: ただ単に 'there was no daylight' と言うのに較べ、daylight を見下しているような響き加わる。
- ❺ is [...] dusted with a little darkness: 少しの闇が（埃のように）かかっている
- ❻ In direct relation to ...: ～と正比例して
- ❼ propagate(s): (思想などを) 伝え広める
- ❽ the most bewildering enigmas: 人を最も困惑させる謎
- ❾ for: すぐあとにカンマが入っているので、すぐ前の enigmas とつながっているように見えるがそうではなく、「というのも」「なぜなら」の意（おおむね because と入れ替え可能——ただし文頭では使えないが）。本作では非常に多用されている。
- ❿ the more lifelike his marionettes, the more godlike his manipulations and the more radical ...: the 比較級, the 比較級（～すればするほど～である）の形にもうひとつ the 比較級が加わっている。「～すればするほど～であ

り、～である」。lifelike と godlike が対をなし、marionettes（人形たち）と manipulations（操り）も頭韻によって対が際立つ。radical: 根本的な

- ❶ the symbiosis between inarticulate doll and articulating fingers: 口がきけない (inarticulate) 人形と、はっきり表現できる (articulating) 指との共生 (symbiosis)。inarticulate doll の前に冠詞 (an か the) が入りそうなものだが、A and B の形において AB が対であることが明確な場合、冠詞がしばしば省かれることは p. 154, l. 16 の driver and passenger について述べたとおり。
- ❷ The puppeteer: 人形使い。l. 3 の The puppet master や p. 162, l. 6 の The master of marionettes とほぼ同じ。
- ❸ speculate(s) in ...: ～に投資する、賭ける
- ❹ a no-man's-limbo between: 普通は no-man's-land（または no man's land）という形で、A でもなく B でもない「曖昧な中間地帯」という意味になる。そして limbo だけでも、カトリックでは地獄と天国の間に存在する場所を指し、広く「中間の、どっちつかずの、(しばしば) 無視された状態」という意味がある。ここではその二つを合わせて、no-man's-limbo という珍しい表現を用い、その場の持つ暗い、どっちつかずさのようなものを強調している。
- ❶ that which, although we know very well it is not, nevertheless seems to be real: that which は 'what you're saying doesn't make sense' などと言うときの what と同じ。it is not のあとに real を補って考える。

to be real. ❶ He is the intermediary ❷ between us, his audience, the living, and they, the dolls, the undead, who cannot live at all and yet who mimic the living in every detail since, though they cannot speak or weep, still they ❸ project those signals of signification we ❹ instantly recognize as language.

The master of marionettes ❶ vitalizes inert stuff with the dynamics of his self. ❷ The sticks dance, ❸ make love, pretend to speak and, finally, ❹ personate death; yet, ❺ so many Lazaruses out of their graves they ❻ spring again in time for the next performance 10 and ❽ no worms drip from their noses nor dust clogs their eyes. ❾ All complete, they once again offer their brief imitations of men and women ❿ with an exquisite precision which is ⓫ all the more

❶ He is the intermediary ...: the intermediary は「媒介者、仲介人」。長いセンテンスだが、He is the intermediary / between us, his audience, the living, / and they, the dolls, the undead, / who cannot live at all / and yet who mimic the living in every detail / since, / though they cannot speak or weep, / still they project those signals of signification / we instantly recognize as language と切って考えるとよい。yet は but とほぼ同じ意味だが、このように and と一緒に使われもするところが but と違う。and yet はこのあと何度か出てくる。

❷ between us, his audience, the living, and they, the dolls, the undead: his audience と the living は us の言い換えで、the dolls と the undead は they の言い換え。they は us と対応させるなら them になりそうなのだが、同じように between you and me を between you and I という例はしばしば見られる。人形を the undead と呼ぶのは、初めから生きていないのだから死んでもいないという理屈。

❸ project those signals of signification: 意味作用のあるシグナルを送り出す

❹ vitalizes inert stuff with the dynamics of his self: 自分自身が持つ活力(the dynamics)によって、生命のない(inert)もの(stuff)に生命を与える

❺ The sticks: 棒切れ

❻ make love: 性交する

の、どちらでもない真空地帯に人形使いは賭ける。教授は媒介者である。彼の観客である、生きている私たちと、彼ら人形、死んではいない者たちとのあいだの媒介者。死んでいない者たちは、生きることはまったくできなくとも、生きている者をあらゆる細部において模倣する。喋ることも、泣くこともできずとも、意味を有する信号、見る者が即座に言語として認識する信号を、彼らは送り出すのだから。

マリオネットの主は、自己の躍動でもって命なき物に命を吹き込む。棒切れたちが踊り、愛しあい、喋るふりをし、しまいには死を装う。が、墓から出てくるラザロさながらに、次の公演時間が来ればふたたびパッと飛び上がり、鼻から蛆虫が垂れたりもせず埃が目詰まっていたりもしない。どこも損なわれていない体で、男や女の模倣をまたしばし、極上の精緻さで披露するが、我々はそれが嘘であることを知っているがゆえにいつそう心乱される。

❷ personate death: 死を演じる、装う

❸ so many Lazaruses out of their graves: ここで切って、次の they がこの文の主語。so many は「非常に多くの」ではなく「同数の」の意。つまり、人形一体一体がラザロのようで、人形の数だけラザロがいるようだということ。ラザロはイエスが死から蘇らせた男。「さながら、墓から蘇ったラザロたちのごとくに」

❹ spring: 飛び上がる

❽ no worms drip from their noses nor dust ...: ラザロのように墓の中にいたのなら、鼻から蛆虫がしたり落ちたりもするだろうし、埃が目をつさいでもいる(clogs)だろうが、という前提に立って言っている。

❾ All complete, they once again offer ...: All complete, / they once again offer / their brief imitations of men and women / with an exquisite precision / which is all the more disturbing / because we know it to be false と切って読む。All complete: 体じゅうどこもちゃんとしている、ということ。

❿ with an exquisite precision: 見事な正確さで

⓫ all the more ...: ますます、なおさら～だ。I want to help him all the more because he is so helpless. (彼がいかに無力だからなおさら助けてやりたい。『コンパスローズ英和辞典』)

trained in Zen, whose sword is his soul, ❶so that neither sword nor swordsman has meaning without the presence of the other. Such swordsmen, ❷armed, move towards their victims like ❸automata, in a state of perfect emptiness, no longer aware of ❹any distinction 5 between self or weapon. Master and marionette had arrived at this condition.

❺Age could not touch Lady Purple for, since ❻she had never aspired to mortality, she ❼effortlessly transcended it and, ❽though a man who was less aware of the expertise it needed to make her 10 so much as raise her left hand ❾might, now and then, have grieved ❿to see how she defied ageing, ⓫the Professor had no fancies of

境地に似た状態に達した。剣士の刀は彼の魂であり、刀も剣士も、もう一方が存在しなければ意味を持たない。こうした剣士たちが刀を持てば、餌食となる相手にまるで自動人形のように近づいていき、心の中は全くの空っぽ、自己と武器との区別はもはやまったく意識していない。主人とマリオネットもこうした境地に達していたのである。

老いもレイディ・パープルを損ねはしない。そもそも死すべき人間の運命をめざしたこともないのだから、そんなものは易々超越している。時おり、彼女が左手を持ち上げるだけでもどれだけの熟練が必要か、よくわかっていない輩が、彼女が老いを拒んでいるのを見て嘆いたりもしたが、教授はそ

❶ so that neither sword nor swordsman 剣士が禅に通じていれば (trained in Zen)、その剣は彼の魂そのものであり (whose sword is his soul)、したがって (so that) ~という流れ。neither sword nor swordsman で冠詞が省かれているのは、p. 160, ll. 6-7 の the symbiosis between inarticulate doll and articulating fingers (物言わぬ人形と、物言うごとくにすべてを操る指との共生関係) について述べたとおり。l. 6 の between self or weapon と Master and marionette も同じ。

❷ armed: 武装していれば

❸ automata: automaton (自動人形) の複数形。

❹ any distinction between self or weapon: between のあとには and が来て between A and B となるのが標準的だが、ここではもはや A でも B でも同じこと、といわば差異の消滅がポイントになっているので、or が出てきても自然。

❺ Age could not touch Lady Purple: touch は「影響を及ぼす」の意味で、悪い影響について使うことが多い。Many people's lives have been touched by the disease. (その病気のために人生が変わってしまった人は多い。『ロングマン英和辞典』)

❻ she had never aspired to mortality: 要するに「人間になろうとしたことは一度もなかった」ということだが、humanity ではなく mortality という語を使ったことで、なろうとしなかったものの中身に「死すべき運命」が含まれること

になる。aspire(d) to ~を志す

❼ effortlessly transcended it: (そうした人間の死すべき運命を) たやすく超越した

❽ though a man who was less aware of the expertise it needed to make her so much as raise her left hand might: 長いが a man から her left hand までが though 以下の部分の主部。a man / who was less aware / of the expertise it needed / to make her / so much as raise her left hand と切るとよい。一人の男／あまり気づいていない／必要とされる熟練を／彼女にさせるために／左手を上げるだけでも。so much as は even と同じと考えていい。I do everything for him, and he's never so much as made me a cup of coffee. (私は何から何までやってあげているのに、彼はコーヒー杯入れてくれたことがない。Longman Dictionary of Contemporary English, Corpus)

❾ might, now and then, have grieved: で、そういう、熟練のすごさがわかっていない者が時おり (now and then) 嘆いたりする、ということ。

❿ to see how she defied ageing: 彼女が老化に抗っているのを見て。要するに、あんなふうについてまでも若いのは不自然だ、などと呑気に嘆いたりするということ。

⓫ the Professor had no fancies of that kind: 教授はそういうたぐいの (of that kind) 気まぐれな考え (fancies) など持っていなかった

expression, ❶ as though she were running instantaneously through the entire repertory of human feeling, practising, ❷ in an endless moment of time, ❸ all the scales of emotion as if they were music. ❹ Crushing vines, her arms, ❺ curled about ❻ the Professor's delicate apparatus of bone and skin with the insistent pressure of an actuality ❼ by far more authentically living than ❽ that of his own, time-desiccated flesh. Her kiss ❾ emanated from the dark country where ❿ desire is objectified and lives. She ⓫ gained entry into the world ⓬ by a mysterious loophole ⓭ in its metaphysics ⓮ and, during

一斉に現われ、あたかも人間が持ちうる感情のレパートリー全部を瞬時に確認しているかのよう、果てない時の瞬間の中でさながら情念の音階をおさらいしているかのようだった。くるんだものを絞め殺す蔓^{つる}のように、骨と皮から成る教授の華奢な体に両腕が絡みつき、時によって水分も抜けた教授の肉体よりもはるかに真に生きている生^{せい}の圧力をぐいぐい加えてきた。彼女のキスは欲望が物質化され命を帯びる暗い国から発していた。世界の抽象的次元にある何か神秘的な抜け穴を通して彼女は这个世界に入ってきたのであり、キスをしている最中、教授の息を肺から吸い取り、自身の胸をその吸った息で

❶ as though she were running instantaneously through the entire repertory of human feeling: 人間の感情のレパートリー全体を一瞬でおさらいしているかのよう。run through ...: ~をひととおりおさらいする。Let's run through the last act once again. (もう一度、最後の幕を通して練習しよう。『動詞を使いこなすための英和活用辞典』)

❷ in an endless moment of time: an endless moment (果てのない一瞬) とはもちろん矛盾した表現だが、一瞬が無限のように思える、という発想は珍しい。

❸ all the scales of emotion as if they were music: as if they were music がなくとも、すでに practising (練習して) という動詞が出ているので scales は「音階、ドレミファ」の意だとわかる。

❹ Crushing vines: 押しつぶす蔓。次の her arms と同格。

❺ curled about ...: ~に絡みついた。以下、curled about the Professor's delicate apparatus / of bone and skin / with the insistent pressure of an actuality / by far more authentically living / than that / of his own, time-desiccated flesh と切る。

❻ the Professor's delicate apparatus of bone and skin: 骨と皮のことを apparatus (装置) とは普通言わない (apparatus of bone and skin と Google で検索してもこの一文しか出てこない)。教授の体を一種壊れやすい機械のように語っている。

❼ by far more authentically living than ...: ~よりはるかに本当に生きてい

る。by far は「ずっと」「断然」を意味し、比較級や最上級を強めるのに使う。This is by far the better. (こちらのほうがずっとよい。『コンパスローズ英和辞典』)

❽ that of his own, time-desiccated flesh: that は一応 an actuality を指すが、とにかく教授の生きた肉体より、彼女の生命なき (はずの) 木の体の方がはるかに生きている、という流れが感じられれば十分。time-desiccated flesh: 時によって乾燥させられた肉体

❾ emanated from ...: ~から発した。emanate は光、熱、香りなどについて使う。

❿ desire is objectified and lives: 欲望が具象化されて (具体的な姿かたちを与えられて) 生きている

⓫ gained entry into the world: こう言うと、ただ entered the world と言うよりも、入ることがかならずしも易しくない場所に入った、というニュアンスが加わる。この場合、the world とは生者の生きるこの世界のことであり、本来木の人形が (少なくとも生きた女性として) 入れるはずはない、という前提がある。

⓬ by a mysterious loophole: 神秘的な抜け穴によって

⓭ in its metaphysics: その形而上的な (抽象的な) 次元における。単純に物理的世界に人形が侵入してきたのではなく、もののありようを原理的に規定する次元を通過して入ってきた、というロジック。

⓮ and, during her kiss, she sucked his breath ...: きわめて抽象的な記述の直後に、何とも生々しい描写が続くことのインパクト。